

## W杯ラグビー3勝の「深い意味」

ラグビーの第8回ワールドカップ(W杯)イングランド大会の日本代表には失礼ながら期待していなかった。どこまで恥ずかしくない負け方をするのか、としか考えなかった。

本当はサッカーファンだが、同じ球技のラグビーも好きだ。しかし、1995年のW杯でニュージーランドに17-145という最多失点記録の惨敗映像を見た側としては、初戦の南アフリカ戦もテレビをつけながら「何点差で負けるのかな」と実は別の部屋で仕事をしていた。

突然、テレビを見続けていた女房の拍手が聞こえたのである。ゲームは後半。日本が南アフリカを追い込むトライをしたときだ。ひょっとして勝つかも说不定。そこからはテレビにかじりついた。そしてご存知の最後の攻撃で劇的トライを奪い、何と34対32で勝ってしまった。

これまで1勝しかできなかったW杯で、南ア戦に加えて、サモア、アメリカと3勝したのは大健闘といえた。今回の日本のW杯はこれで十分だったように思う。それ以上に「残したもの」があまりに多いからだ。

世界のラグビー界を変える可能性のある革命的な3勝だった。これまで、どうも世界のラグビー界は怪しいと思っていた。W杯といってもたかだか30年余り前からだし、いつも常連国が当たり前のように出場し、仲間内だけで順位を決める“排外主義”のW杯に見えていた。

まずは粗っぽい予選のルール。W杯には20カ国が出場するが、前回大会のベスト12カ国と開催国は自動的に予選免除だ。残りは8カ

国しかないから、本大会に進めるのは各大陸で1~2カ国に限られる。新参加者にきわめて厳しい決まりになっている。ちなみにサッカーW杯は32カ国が出場、予選免除は開催国だけだ。

さらにラグビー最大の欠点といえるのが「階級社会」の悪弊をそのまま引きずっていることだ。旧貴族が根を張る英国から生まれた紳士のスポーツという触れ込みだが、これを変えないと世界のスポーツにはなり得ない。だから五輪には7人制しか採用されない。

国際ラグビー界では「ティア1」「ティア2」というカテゴリー分けができていて、最強のティア1が10カ国で、北半球6カ国、南半球4カ国で構成される。このカテゴリー分けがなぜかわからないのだ。世界ランクが変わっても、いったんティア1に入ればお家安泰というわけだ。お互いに利益を守り合う日本古来の「互助会」に似ている。

日本は「ティア2」のグループだが、ティア1との扱いの差は歴然としている。ティア2の国がティア1に国際試合を申し込んでも普通は断られるのがオチだ。

今回のW杯の第2戦、覚えている方も多いただろう。日本は南アとの激戦を終え、疲れが取れない「中3日」の試合。対するスコットランドはこれが初戦。元気一杯に躍動し日本に圧勝した。サッカーのW杯ならこんなことは起こらない。すべての国がほぼ同じ日程で戦い、特定の国を利することはない。

不公平、不平等というもうひとつの戦いに“勝った”日本は分厚い壁をぶち抜いたといえる。弱い国が遠吠えのように改革を叫んで

も無視されるだけだが、実績を示せば強豪国も聞く耳をもつ。

今度のW杯はまた、南の存在感を高めたという意味で革命的であった。史上初めてニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチンの4強を南半球勢が占めた。ラグビーはそもそも英国の旧植民地が広がる南半球で盛んになったが、とうとう本家よりも旧植民地のほうが強くなったというわけだ。

W杯で大活躍した日本の五郎丸歩は世界最高峰と称される南半球のプロリーグ「スーパーラグビー」に参戦することが決まった。来シーズンはオーストラリアのレッズとヤマハ発動機の双方でプレーする。そう、世界で最もレベルが高いのは南半球なのだ。

ラグビーの次回W杯は日本で行われる。日本国内の「トップリーグ」への人気も高まっているが、一気に世界の強豪国になれるかというとうそう簡単な話ではない。

日本のラグビーは実業団中心のアマチュアである。選手は会社に属し、原則会社員として生活している。このアマチュアリズムにこだわる人も少なくない。しかし、もう一段の飛躍のためにはプロ化を考える時期に来ているのではないか。アメリカは来春からプロリーグを創設する。

かつて日本サッカーは1968年のメキシコ五輪で銅メダルに輝いた。そのチームは実業団、大学のアマチュアを徹底的に鍛え上げた「特別チーム」だった。しかし、特別チームは一過性でその後は長期低迷期に入った。Jリーグをつくりプロ化をしたのはその打開策だった。ラグビーはどうする？ ●

## モンゴルをつなぎ止めよ

大相撲人気が復活しているという。女性は土俵にのぼってはいけないという差別的伝統があるのに、「相撲女子」がごひいきの力士を追いかけ、きゃあきゃあ騒いでいる。

2011年に有名力士を含む八百長事件が発覚し、本場所を中止する事態になってから、そう時間がたったわけではない。当時は大相撲存廃論議まで出た。今の人気は理解しがたい。

理由はモンゴル力士の存在だろう。大相撲は外国人力士に門戸を開いており、幕内力士40人余のうち、10人程度がモンゴル人だ。十両も数人いるから、有力力士のざっと4分の1がモンゴル出身ということになる。

モンゴルには「モンゴル相撲」がある。ただし土俵はなく草地に倒さないと勝負が決まらない。土俵のある日本がモンゴル相撲を参考にしたとの説もある。いや、日本の国技の大相撲が外国からの借り物であるはずがないと言う人もいる。どちらでもいいが、2つの相撲が非常に似ていることは間違いない。

日本人の老若男女はモンゴル人を外国人とっていないのではない。彼らは我慢強いし、顔は日本人と変わらない。そして、何より日本語がうまい。引退した朝青龍、現役の白鵬、日馬富士、鶴竜の3横綱など、みんな下手な日本人より日本的である。勝利インタビューでも「心技体」など気の効いたことを言う。

朝青龍は高校時代に訪日しているからうまくて当然だが、白鵬や日馬富士は入門したとき、日本語は全くしゃべれなかったという。

以前にハワイ出身の小錦、曙など巨漢力士が活躍した時期があった。欧州や中東、ブラジルからも入門者が絶えない。しかし、日本語の力はモンゴル人の比ではない。

いくら「日本語漬け」の相撲部屋の生活に明け暮れたとはいえ、言葉の間の取り方からイントネーション、敬語まで、日本人と変わらない日本語を話せるのはなぜか。モンゴル語はアルタイ語系で、日本語もその傍流と習ったことがあるが（その説も怪しいらしいが）、その真偽はともかく言語のつながりは深い。日本とモンゴルの国境は大相撲に限っては消えたと言ってよい。

安倍首相は15年10月末にモンゴルおよびカザフスタンなど中央アジア5カ国を訪問した。モンゴル訪問は2年半ぶり2回目。エルベグドルジ大統領、サイハンビレグ首相らと会談、両国の絆と「戦略的パートナーシップ」をうたい上げた。

また安倍首相は北朝鮮とパイプがあるモンゴルに対し、拉致問題への理解と国連での日本への協力について感謝を表明した。さらに日本とモンゴル両国はEPA（経済連携協定）を署名・承認した。

表向きはそういう内容が示されたが、安倍訪問の真の狙いは「モンゴルのつなぎ止め」だったのである。つまりモンゴル重視をあらためて確認するために足を運び、念押しをしたとみてよい。もちろん背景には中国のカネにモノをいわせる支援攻勢がある。

ただ、モンゴル人の「中国嫌い」は根が深い。東西冷戦が終わって、旧ソ連の傘下にあったモンゴルが社会主義を捨てた1994年ごろ、自由主義市場経済に転じた姿

を現地取材したことがある。

旧ソ連と中国に挟まったモンゴルは地政学上微妙な位置にあり、一時、清朝の版図の中にあった。しかし旧ソ連という強国を後ろ盾にすれば中国支配から逃れられると考え、71年から旧ソ連の傘下に入った。そしてソ連共産主義が崩壊した後の91年、初めて民主的に大統領を選び、自立した。

歴史的、政治的に「中国嫌い」が多いのだ。モンゴルの首都ウランバートルから中国の北京に電話しようとしたときのことだ。日本への国際電話はすぐにつながるのに、ホテルのオペレーターは「中国へはなかなかつながりませんよ」とそっぽを向いている。というより知らん顔だ。結局通話を諦めた。

有名なゴビ砂漠のど真ん中に四輪駆動車で行った。石油のくみ上げ機はあるが、これが機能しておらず、周囲に石油がしみ出ている。もったいないではないか、とモンゴルの専門家に聞くと「そうだ。もたもたしていると隣国の中国が石油を地下から吸い上げてしまう。こっちは資金不足で開発が間に合わない。地下に国境はないからね」と残念そうに言った。

安倍首相はモンゴルをどう見たのだろうか。91年から始まったモンゴル支援国会合を「主催」していたのは米口中ではなく日本である。資源重視の30社の日本企業が同行したが、彼らの狙いもモンゴル取り込みだ。

TPPや安保法案など懸案が多いときに首相外遊などけしからん、という声もあるが、外交はタイミングが大事である。

(日本ブラジル中央協会  
常務理事 和田 昌親)